神様酒場
VOL.02
R18
BEAR HAND

「やはりこの小娘が王を語るにはちょいと器がな…」
「ちょいとどころではない」
「傍ら痛しというものだ！ふはははっ」
「ぐぬぬ…」
「こいつら…」
「別の私が以前世話になったようだな……どうした？何故黙る」
「この赫々たる姿に恐れをなしたのか？」
「人違い？詭弁だな」
「貴様らの霊基は確かに根底が同じものだろう」
「この人絶対何か勘違いしているよ…」
「このお姉さんなんか怖い…」

「ぐちゅ…ちゅぷ…」
「ずいぶん慎ましいモノを
ぶら下げているな…所詮は子供か♥」
「あっ…うぅぅ…」
「この程度の器で臆面もなく
他人を貶せたものだ…ずるるっ」
「ちょっ」
「ちょっと待って…
あれは☆5の方じゃ…」
「口を閉じろ！覚えの悪い孺子に
躾をするのは王の責務である♥」

「…このような純朴な子らがどう足を踏み外せばあの無礼な者達になるのだ」
「きっと母の愛情が足りなかったのだな…♥」
「あっ…うぅ…身体が…おかしくなっちゃう…」
「何か出そう…」
「貴様らの母親のかわりに躾けてやろうっ♥」
「腰…うごかさないで…」
「ぐぅっ！」
「はぁっ…おちんちん…熱いよ…」
「溶けちゃう……っ」

「どうだ！征服王よ♥」
「自分の肛門を他人に征服された感想は♥」
「ふん…語らずとも良い」
「いやだ…わぁっ！」
「あっ…はぁ…ぐううぅっ!!」
「この精液はっ♥」
「貴様の前立腺が私の舌に完全敗北した証拠だっ♥」
「ごめなさい…！」
「お姉さん…ごめなさい…」
「成長したボクがきっと何か悪いことをしたんでしょう…ボクが代わりに謝りますから」
「いまさら上辺だけの謝罪になんの価値も見いだせぬ♥」
「受けた屈辱は貴様らの身体に刻み込んでやろう」
「この乳王たる私の威光を貴様らの目に焼き付けるっ♥」

「ふんっ…青二才が…」
「はむっ…ずるぅ…」
「生意気に…舌で責め立ててくるなど…っ♥」
「ずるるる…」
「んっ…♥」
「じゅる」
「この舌技…っ♥…はぁっ♥」
「貴様らっ…どこで覚えたのだ…っ♥♥」
「くっ…子供ちんぽが♥腔内で……♥どんどん太くなって……♥」
「認めざるおえない…っ♥こいつらのちんぽはっ♥王の器だっ♥♥♥」

「小僧っ…♥
人の胸をっ♥勝手に
吸うのではないっ♥♥」
「母乳がっ♥勝手にっ♥」

「くっ…♥膣内に射精すなっ♥♥
王の身体をっ♥まるで便器みたいにっ♥♥」
「おっ♥♥やめろっ…♥」
「きっ…貴様らぁ…♥ガキのっ♥
くせにっ♥生意気だぁっ♥」

[redacted]

「この…っ♥乳王がっ…♥♥
しつけてやるから…っ♥♥」
「私の身体で…っ♥一からっ…♥
王にたいするっ♥♥れいぎをっ♥♥
おしえてやりゆうっ♥♥」

「ぐうっ…♥♥
王同士の対決…っ♥」

「二人相手は…っ♥
さすがにっ…♥♥
無理か…っ♥♥♥」

「ね…ギルくん…
今のうちに逃げよう…」

「うん…」

著　　者　俺正讀＆魚生
サークル　熊掌社
翻　　訳　水野 様
翻訳監修　ねこてゐ 様
発 行 日　2019/08 (C96)
印 刷 所　株式会社 栄光
連 絡 先　ireading62@gmail.com

18歳未満の閲覧購入禁止、無断転載禁止